国際シンポジウム

日本の大衆文化と西洋

−漫画・アニメーション、ジェンダーをめぐって

概要

学習院大学の卒業生である宮崎駿が監督した『ハウルの動く城』(2004年)がアルザス地方のコルマールでロケーションを行った上で制作されたことはよく知られている。2008年に学習院大学大学院身体表象文化学専攻で特別研究員を務めた高畑勲もまた、2016年、CEEJAでの講演のために「ハウルの舞台」としてのコルマールを訪れている。今や日本製アニメーション・ファンの〈聖地〉の一つとして定着しつつある、しかも学習院大学とも所縁の深い当地で、この度、漫画・アニメーション、ジェンダーを主たるテーマとした「日本の大衆文化と西洋」に関する国際シンポジウムを開催する。

大衆文化は、例えば仏日間の漫画・アニメーションの流れを見ても、往還を繰り返し、言わば「環流」の様相を呈する。日本の漫画は近代以降の西洋と交流するなかで産声を上げたが、例えば1978年、永井豪の漫画を原作とするアニメーション作品『UFOロボ グレンダイザー』が《Goldorak》のタイトルの下にフランスでテレビ放映され、大人気を博した。あるいはジャン・ジロー、エンキ・ビラルといったBD作家が、宮崎駿や大友克洋、谷口ジローら日本の代表的漫画作家に影響を与えたとされる。2000年にパリ郊外で始まった日本の漫画・アニメーションを中心とする展示会、《Japan Expo》における《cosplay》が毎年話題を呼んでいるし、アングレーム国際漫画祭(1974年〜)では2001年の谷口ジロー以来、日本人受賞者が出続けている。日本の漫画の影響下に描かれたトニー・ヴァレントの『ラディアン』(Radiant, 2013-)はアニメ化されて、2018年にはNHKでも放映された。

おそらく、このような動きは単なる「コンテンツ」や観光資源としての文化の流通の問題に留まらない諸相を背後に持っているだろう。またそろそろ、男性中心的に語られる大衆文化史が相対化されるべき時期も来ているように思われる。それを考えるのが私たちの課題である。

本シンポジウムは、CEEJA(アルザス・欧州日本学研究所)の協力の下、主にフランスの日本文化研究者を迎えつつ、学習院大学における大衆文化研究の成果を海外に発表する場として企画された。「文化の環流」を全体のキーワードとし、また1日目のテーマを「世界のなかの日本の漫画・アニメーション」、2日目のテーマを「日本の大衆文化とジェンダー」と定め、まずはそれぞれ4名ずつの研究発表を行う。その後、各日共に、大衆文化を支える様々な事象に目を向けた討論をフロアと共に行いたい(岡田尚文)。

第１日目「世界のなかの日本の漫画・アニメーション」

第２次大戦以降、一般的な日本人はバンド・デシネやコミックスなどの他の国の作品について、低い関心しかもってこなかった。その状況は、現在も大きくは変わっていない。しかし、いくつか重要な変化もある。1990年代以降、インターネットの普及が後押しとなり、他の国の「漫画的なもの」やアニメーションなどに関心を持つ人が増え、翻訳されたバンド・デシネやコミックスの出版も徐々に増加している。その状況の中で、海外作品と比較することで改めて日本の漫画やアニメーションや、それらに関連する文化、社会背景、歴史などについて考えようとする研究者も少しずつ増えている。また、海外研究者の数も増え、日本人が見過ごしている多くの問題が、彼らによって研究されており、重要な成果をあげている現実がある。さらには、「ポストメディウム状況」と言われる現在において、漫画やアニメーション自体も大きな変化の波にさらされており、デジタル技術やインターネットなどを背景としたメディア全般の変化に関心を持ちながら、漫画やアニメーションの局面をグローバルに考える必要性も高まっている。

このような状況を背景に、これまでの歴史のとらえ直しや、文化や言語の違いや共通性などの問題が改めて浮上しており、本シンポジウムの１日目で検討しようとするテーマには、そのような問題認識が込められている（佐々木果）。

第2日目「日本の大衆文化とジェンダー」

ジェンダー論の日本の大衆文化研究への適用は、特に漫画・アニメーション研究の領域において、まだ始まったばかりであり——例えばアメリカ映画研究が、フェミニズム批評が登場した1970年代以来、当該領域で多くの成果を得ているのに比して——決して充分とはいえない。本シンポジウム2日目は、そのような状況に鑑み、また大衆文化研究における男性中心的な視点（学問的手続き）を相対化するべく、メディウム（雑誌、映画、テレビ、インターネット等）やジャンル（少女漫画、アニメーション、美少女ゲーム等）の問題に加え、消費者・担い手（少女、オタク、中産階級等）の問題、さらには彼女ら／彼らを育むインフラとしての都市、あるいはそこで用いられる（ジェンダー化されないことがない）翻訳言語といった問題に仏・日双方2名ずつの発表者が取り組み、ジェンダーの多様な側面を明らかにする（岡田尚文）。

プログラム

11/2 (SAT).

【世界のなかの日本の漫画・アニメーション】

日本時間　17:00-17:10　/　フランス時間　9:00-9:10

開会あいさつ…久保　公二/KUBO Koji（国際センター所長）
…カトリーヌ・トロットマン/Catherine TRAUTMAN
(CEEJA所長/元フランス文化交通大臣）

日本時間　17:10-17:20　/　フランス時間　9:10-9:20

開会に寄せて…内田　浩行/UCHIDA Hiroyuki
（在ストラスブール日本国総領事）
…井上　寿一/INOUE Toshikazu（学習院大学 教授）

日本時間　17:20-17:50　/　フランス時間　9:20-9:50

講演① MANGAはどこから来たか ―グローバル・ヒストリーの観点から
…佐々木　果/SASAKI Minoru(学習院大学 教授）

日本時間　17:50-18:20　/　フランス時間　9:50-10:20

講演②「マンガの翻訳」
…野田　謙介/NODA Kensuke（漫画研究者・翻訳者）

日本時間　18:20-18:50　/　フランス時間　10:20-10:50

講演③ メディウムとフォーマット ―マンガのスタイルを考える
…三輪　健太朗/MIWA Kentaro（東京大学大学院 准教授）

日本時間　18:50-19:20　/　フランス時間　10:50-11:20

講演④ オウム真理教というフィクション
…アントナン・ベシュレール/ Antonin BECHLER
（日仏会館・フランス国立日本研究所 研究員）

日本時間　19:30-20:00　/　フランス時間　11:30-12:00

パネルディスカッション
…〈モデレーター〉イラン・グエン/Ilan NGUYEN(MEMA学術専門委員）
…〈コメンテーター〉夏目　房之介/NATSUME Fusanosuke
（元学習院大学 教授）

日本時間　20:00　/　フランス時間　12:00

閉会

11/3 (SUN).

【日本の大衆文化とジェンダー】

日本時間　17:00-17:30　/　フランス時間　9:00-9:30

講演① 手塚と宝塚、あるいはディズニー
—都市中産階級の成立と漫画・アニメーションにおけるジェンダー
…　岡田　尚文/OKADA Naobumi(学習院大学 非常勤講師)

日本時間　17:30-18:00　/　フランス時間　9:30-10:00

講演② 「少女」とメディア —少女漫画の源流を辿って
…　大多和　朋子/OTAWA Tomoko
(同濟大学外国語学院 特別招聘講師)

日本時間　18:00-18:30　/　フランス時間　10:00-10:30

講演③ 『CLANNAD』から考える
—オタク文化における「男性のまなざし」と「内面」
…ジュリアン・ブヴァール/Julien BOUVARD(リヨン第三大学 准教授)

日本時間　18:30-19:00　/　フランス時間　10:30-11:00

講演④ 漫画におけるジェンダーの翻訳 —クィア的な視点
…ブランシュ・ドゥラボード/ Blanche DELABORDE
(福岡大学 非常勤講師、翻訳家)

日本時間　19:10-19:40　/　フランス時間　11:10-11:40

パネルディスカッション
…〈モデレーター〉レギーネ・マティアス/Regine MATHIAS
(アルザス・欧州日本学研究所 研究部門副所長)
…〈コメンテーター〉夏目　房之介/NATSUME Fusanosuke
(元学習院大学 教授)

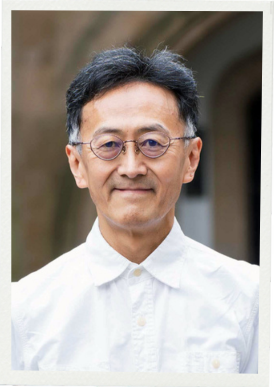
日本時間　19:40　/　フランス時間　11:40

閉会あいさつ …柳本　大地/YANAMOTO Daichi
(学習院大学 国際センター 准教授)
…レギーネ・マティアス/Regine MATHIAS
(アルザス・欧州日本学研究所 研究部門副所長)

日本時間　20:00　/　フランス時間　12:00

閉会

登壇者略歴



佐々木　果（SASAKI Minoru）

・マンガ編集者。学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻・教授。マンガ研究、視覚文化史。

・著書『まんが史の基礎問題――ホガース、テプフェールから手塚治虫へ（Foundations for a History of Manga: From Hogarth and Töpffer to Tezuka）』（オフィスヘリア、2012年）、『まんがはどこから来たか』（オフィスヘリア、2009年）、『〈美少女〉の現代史――萌えとキャラクター』（ササキバラ・ゴウ名義、講談社、2004年）、『それがVガンダムだ』（ササキバラ・ゴウ名義、銀河出版、2003年）、『コンタックスはいかにしてキエフとなったか（Contax to Kiev: A report on the mutation）』（オフィスヘリア、2000年）。マンガ研究サイト「M studies: Forum of Comics Studies」（http://mstudies.org）を運営。

野田　謙介（NODA Kensuke）

・マンガ研究者・翻訳者。学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程在籍。

専門領域は日仏米を中心としたマンガ理論と歴史の比較研究。

・主要業績：「コマ割りは「何を」割っているのか」（『ユリイカ』［第40巻第7号、青土社、2008年］所収）、「マンガにおけるフレームの複数性と同時性について：コマと時間をめぐる試論（1）」（『マンガを「見る」という体験』［水声社、2014年］所収）、「とあるMの定義と起源」（『ユリイカ』［第45巻第3号、青土社、2013年］所収）。

・主要訳書：ティエリ・グルンステン『マンガのシステム』（青土社、2009年）、エマニュエル・ギベール『アランの戦争：アラン・イングラム・コープの回想録』（国書刊行会、2011年）。

三輪　健太朗（MIWA Kentaro）

・東京大学大学院総合文化研究科准教授、学習院大学非常勤講師。

マンガ論、表象文化学専攻。

・主要業績：『マンガと映画―コマと時間の理論』（単著、NTT出版、2014年）、『マンガメディア文化論―フレームを越えて生きる方法』（共著、水声社、2022年）、『映画論の冒険者たち』（共著、東京大学出版会、2021年）、『マンガ／漫画／MANGA―人文学の視点から』（共著、神戸大学出版会、2020年）、「楳図かずお論―変容と一回性」（論文、『文學界』［76巻4号、2022年4月］所収）、「マンガ、近代のエフェメラ―あるいはルイス・キャロルの二つの時計」（論文、『新潮』［112巻6号、2015年5月］所収）、『映像が動き出すとき―写真・映画・アニメーションのアルケオロジー』（共訳、トム・ガニング著、みすず書房、2021年）など。

アントナン　ベシュレール（Antonin BECHLER）

東京日仏会館・フランス国立日本研究所（Umifre 19 フランス外務省・国立科学研究センター）研究員、ストラスブール大学日本学科准教授。文学博士、日本文学専攻。日本現代文学及びサブカルチャーを研究テーマにして、著作に『大江健三郎あるいは暴力の経済』（PUS、2015）の他、『大江健三郎選集』（ガリマール社、2016）を編集。同巻収録の短編「奇妙な仕事」、「セヴンティーン第二部・政治少年死す」他を翻訳。石田仁志と『文化表象としての村上春樹 - 世界のハルキの読み方』（青弓社、2020）を編集。

岡田尚文（OKADA Naobumi）

・学習院大学、慶應義塾大学ほか非常勤講師、学習院大学国際センターPD共同研究員。フランス中世史、表象文化学専攻。

・主要業績：『円卓―古希の堀越孝一を囲む弟子たちの歴史エッセイ集』（共著、東洋書林、2006年）、『騎士道百科図鑑』（共訳、悠書館、2010年）、『映画のなかの社会／社会のなかの映画』（共著、ミネルヴァ書房、2011年）、「蒸気機関車イメージの変容、あるいはショックの馴致について―ディズニー映画『リラクタント・ドラゴン』（1941 年）を手掛りに」（論文、『学習院大学文学部研究年報』［64号、2017年3月］所収）、『映画で味わう中世ヨーロッパ―歴史と伝説が織りなす魅惑の世界』（共著、ミネルヴァ書房、2024年）、『映画と空間』（共著、ミネルヴァ書房、近刊）などがある。

大多和　朋子（OTAWA Tomoko）

・同濟大学外国語学院特別招聘講師(上海)。日本文化史・女性史専攻。韓国大邱、中国杭州、上海等の大学で日本史・日本文化の教育、研究に従事。

・主要業績：「遊行女婦考 ―日本古代における遊女の一起源の研究―」（論文、『人文科学論集』第7号所収、学習院大学人文科学研究科編、1998年）、「檜垣・白女考 ―平安時代前期における遊女像―」（論文、『日本律令制の展開』所収、吉川弘文館、2003年）、「「遊女」の誕生 ―『昌泰元年歳次戊午競狩記』と九世紀の文人貴族」（論文、『東アジア海をめぐる交流の歴史的展開』所収、東方書店、2010年）、「朝鮮王朝妓生の管理体系とその流出の様相」（翻訳、原著禹仁秀、『東洋文化研究』第九号所収、学習院大学東洋文化研究所編、2007年）など。

ジュリアン・ブヴァール（Julien BOUVARD）

・2006から2009年まで山梨大学、そして立命館大学に講師として勤務。
2011年よりフランス国リヨン第３大学にて日本語学科准教授。

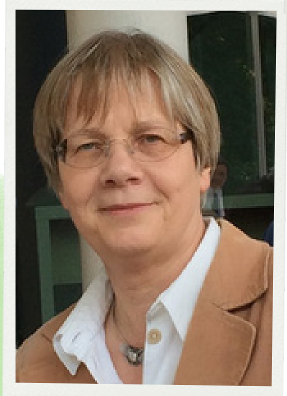
・主要業績：『Japon pluriel - Arts graphiques et culture visuelle au Japon』（共著、Picquier出版、2019年）、「Turning the Page: Reading Manga in the Pandemic Age」（論文、『The Coronavirus Pandemic in Japanese Literature and Popular Culture』、Routledge、2023）、「Cachez cette case que je ne saurais voir - Le manga pornographique et la censure dans le Japon du XXIe siècle 」（論文、『Tactiques d’expression à l’ombre de la censure – A l’ombre de la censure II』、L’Harmattan、2023年）などがある。「L'eldorado insaisissable : le traitement du Japon dans la presse vidéoludique française de la première moitié des années 1990」（論文、『Lire les magazines de jeux vidéo - Couverture(s) de la presse spécialisée française』、Presses universitaires de Liège、2022）などがある。

ブランシュ・ドゥラボード（Blanche DELABORDE）

・福岡大学非常勤講師、マンガ翻訳者。マンガ表現学、表象文化学専攻。
・主要業績：『Taiyo Matsumoto : Dessiner l’enfance』（共著、9eArt+ éditions - Festival International de la Bande Dessinée、2019年）、『Poétique des impressifs graphiques dans les mangas』（INALCO博士論文、2019年）、「Hearing Manga」（章、『The Cambridge Companion to Manga and Anime』、2024年）、「Le blanc dans les mises en page multicouches des mangas」（論文、『Espaces du blanc : Concepts et pratiques』、Hémisphères、2024年）などがある。

【モデレーター】
イラン・グエン（Ilan NGUYEN）

・フランス国立東洋言語文化学院(INALCO)ほか非常勤講師、ヨーロピアンマンガ・アニメ博物館(MEMA)学術専門委員。日本語、漫画・アニメーション史専攻。
・主要業績：雑誌編集などでマンガ・アニメーション論を日本語・仏語で執筆(1995年～)。パリでの「日本の新しき映像」(1999、2001、2003年)をはじめ、国内外の数多くの映画祭のプログラム・コーディネートを担当（1999年～）。映像作品（高畑勲、川本喜八郎、山村浩二作品など）やマンガ（宮崎駿、谷口ジロー、坂口尚作品など）の翻訳多数。『Le Cinéma d’animation en 100 films』（共著、Capricci、2016年）、『日仏アニメーションの文化論』（共著、水声社、2017年）、『Michael Dudok de Wit, le cinéma d'animation sensible』（共著、Capricci、2019年）、『アニメーション文化 55のキーワード』（共著、ミネルヴァ書房、2019年）、「「祈りのように」響く映画：岡本忠成『南無一病息災』（1973年）」（論文、『病とその表象・日仏シンポジウム論文集』［早稲田大学、2024年3月］所収）、宮崎駿著『風の帰る場所』（仏語翻訳、imho、近刊）などがある。



【モデレーター】
レギーネ・マティアス（Regine MATHIAS）

・1977年、ウィーン大学にて日本研究の博士号取得。ボン大学講師を経てデュイスブルクおよびボーフム・ルール大学日本史教授。2016年よりルール大学名誉教授、現CEEJA日本研究部門副所長。
・専門分野:日本社会経済史; 日本都市文化の歴史; 日本鉱業史、特に鉱山の絵巻物の研究。
・主な出版物:
“The Nation at work: gendered working patterns in the Taishō- and Shōwa periods”, in: Andrea Germer et. al (eds), Gender, nation and state in modern Japan, London and New York: Routledge 2014, S. 141-163.
“Regional identity in the making? Industrial heritage and regional identity in the coal region of Northern Kyūshū in Japan”, in C. Wicke, S. Berger, J. Golombek (eds), Industrial Heritage and Regional Identities, London and New York; Abington: Routlege 2018, pp. 136-167.
“Gold und Silber für den Shōgun. Japanische Bergleute: zum Profil einer sozialen Randgruppe in der Edo-Zeit “（「将軍家の金銀を支えた人々:江戸時代の社会的弱者集団としての日本人鉱山労働者」, in Stephan Köhn & Chantal Weber (eds), Outcasts in Japans Vormoderne: Mechanismen der Segregation in der Edo-Zeit, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag 2019, 177-200.
“The Development of Mining Schools in Japan”, in Erich Pauer and Regine Mathias (eds), Accessing Technical Education in Modern Japan, Folkstone: Renaissance Books, 2022, pp. 303–346.　他

【コメンテーター】

夏目　房之介（NATSUME Fusanosuke）

・1950年東京生。青山学院大学卒。出版社勤務後、マンガ、エッセイ、マンガ評論などを手がける。78～92年、週刊朝日に「ナンデモロジー學問」他を連載。2008～21年、学習院大学大学院身体表象文化学専攻教授。
・マンガ論の著書に「手塚治虫はどこにいる」（92年、筑摩書房）、「手塚治虫の冒険」（95年、同上）、「マンガの読み方」（共著、同年、宝島社）「マンガはなぜ面白いのか」（97年、ＮＨＫ出版）、「マンガ／世界／戦略」（2001年、小学館）、「マンガに人生を学んで何が悪い」（2006年、ランダムハウス講談社）、「マンガ学入門」（共著、2009年、ミネルヴァ書房）他多数。
・96年よりＮＨＫ衛星「ＢＳマンガ夜話」レギュラー出演。同年ＮＨＫ人間大学「マンガはなぜ面白いのか」テレビ講義。マンガ批評への貢献により朝日新聞社手塚治虫文化賞特別賞受賞。同年、国際交流基金主催「現代日本短編マンガ展」を企画構成、のち欧州各地を巡回。台湾、韓国、タイ、インドネシアなどのマンガ事情を調査、仏、独、英、米、香港など世界各地で講演。